

高校生の地域・生活に対する態度と人間関係

—山形、福島、東京の比較を通じた分析—

坂西 友秀¹⁾・板本 洋子²⁾

《調査の目的》

結婚問題は、家の跡取り問題、農業後継者問題とかかわって、農村で深刻化している。若者を地域に定着させるために、農村部において過疎に対する対策、地域の振興のための観光開発、工場の誘致などさまざまな取り組みが行われている。こうした事業を考慮すると、十ば一からげに農村部と言い切ることは難しく、地域開発のし方や農業経営のあり方や規模などによって、住民の農業に対する取り組みや意識の違いが現れると予想される。さらに、こうした地域の発展の質的な違いは、住民の生活や人間関係、価値観などにも何らかの影響を及ぼすものと思われる。本調査では、農村の10代の青年の意識をより詳しく検討するために、典型的と思われる2地区を選び比較検討することにした。福島県玉川村と山形県高島町である。玉川村は、郡山に隣接した農村地帯であり、1970年代前半までは、農業を中心とした第一次産業によってなり立っていた地域である。しかし、最近では、都市部から多くの工場を誘致し、工業団地の設置にも積極的に乗り出している。また、村内には、福島県で初の空港が建設されつつある。基幹産業が農業から工業へと移行してきている地域である。一方、高島町も全体的には同様の傾向にある地域であるが、農業規模を大規模化することにより第一次産業を維持しようとしている。また、町内には有機農業を主体に農業の再生を目指すグループもある。このような特徴から、我々は、高島町は、農業問題に対して玉川村とは異なる接近をしている地域であると考えたのである。

本調査では、青年の地域に対する意識、伝統的な性役割や人間関係、農業に対する意識、家の跡取りになることに対する意識、男女の人間関係に関する意識や行動を、都市部(東京)と農村部(山形・福島)の高校生の間で比較対照することによって明らかにすることを目的とする。そして、都市部と農村部の高校生の間でどのような意識・行動上の違いがあるのか、また、農村部であってもそれぞれの地域によって違いがあるのか、あるとしたらその違いは地域の環境や文化の特徴とどのように関係しているのかを明らかにする。

《方法》

《調査の内容・調査票の作成》 地域生活全般について質問紙形式でたずねた。内容は次のとおりである。1. 今住んでいる町や村に対する好き嫌い、満足している点や不満に思っている点。2. 高校卒業後の進路、将来定住したいと思うところ。3. 友人・異性ととの人間関係、結婚観。4. 子育てや台所仕事、親との関係などにかかわる性役割観・伝統的価値観。この質問は、次の3つの場合について回答させた。①自分自身について、②父親・母親が考えていることの推測、母親や父親のような人になりたい、結婚したいと思うか。5. ①地域の人達が一般に持っている特徴についてのイメージ。②福島の高校生には、東京に住んでいる人達が一般に持っていると思う特徴についてのイメージを、東京の高校生には、農村に住んでいる人達が一般に持っていると思う特徴についてのイメージを回答させた。6. 農村の結婚問題について。①農村には結婚難(嫁不足)問題があると思う

か。②「農村へは嫁に行きたくないという女性が多い」理由。③農家の跡取りになること、農業をやることについて。8. その他。10年後についている仕事、結婚している可能性について回答させた。

〈調査方法〉 調査対象： 福島県内の公立高校1校、私立高校1校の女子200名、男子161名、計361名。いずれも男女共学で、玉川村およびその周辺の市町村に居住する生徒である。東京都内の私立女子高校1校、私立男子高校1校、都立高校（男女共学）1校の女子129名、男子139名、計268名。東京都周辺の県、例えば千葉県、埼玉県、神奈川県などからの通学者が含まれている。山形県内の公立高校2校の女子109名、男子68名。いずれも男女共学で、高島町およびその周辺の市町村に居住する高校生である。総数は、女子438名、男子368名で、合わせて806名である。

調査期日： 1991年11月～1992年1月

調査の実施： 地域に生活する青年の意識や行動の実態をとらえるために、社会に巣立つ直前の高校3年生を対象にアンケート調査を実施した。各高校を訪ね、校長先生に調査を依頼した。実施に際しては、回答者のプライバシーを守る旨を強くお願いした。調査の実施・回収は、学級担任を通じて行い、後日受け取った。

〈結果と考察〉

「自分の住む地域に対する満足・不満」に関する質問、「異性との人間関係」に関する質問、自己・父親・母親の「伝統的価値観」に関する質問、農村・東京の「イメージ」に関する質問、「農村の嫁不足の原因」に関する質問については、男女差、地域差、「跡取り」・「農業後継者」との結婚に対する積極性の有無の各要因の効果を同時に考慮しながら分析するために、男女×地域（山形・福島・東京）×結婚に対する積極性の分散分析を行う（ $p < .05$ 以下で有意な結果のみ記述する）。他の質問に関しては、回答頻度およびパーセンテージを中心に整理する。

I 高校生を取り巻く環境

1 家族の人数： 一緒に住んでいる家族の人数は、福島と東京で違いが見られる。福島では4人（22.5%）、5人（20.9%）、6人（19.0%）、7人（15.9%）、3人（11.1%）、東京では4人（45.2%）、5人（23.9%）、3人（17.5%）になっている。東京は3人、4人家族だけでも62.7%と過半数を占める。それに対して、福島は33.4%、山形は31.2%であり、両者の開きは二倍にもなる。東京は福島・山形に比べて家族の人数が少ないことがわかる。家族の人数の違いは兄弟姉妹の数にも現れており、福島・山形の方が東京に比べ、2人、3人の割合が高くなっている。さらにはっきりとした傾向は、祖父母との同居の有無に見られる。同居の比率は、東京20%であるのに対して、福島54.7%、山形61.3%である。

2 父親の職業： 父親の職業は、福島、山形、東京ともに会社員がもっとも多い。東京では66.6%と最も比率が高く、山形42.5%、福島34%の順になっている。東京ではサラリーマン専業が過半数を超え一般的であるのに、山形・福島では半数を割っている。とりわけ、福島は、山形に比べてもその割合が低い。福島では、農業との兼業者が12.2%と多くなっている。同じ農村地域と思われる山形では、兼業農家はごくわずかしかない。山形の方が福島に比べ、サラリーマン化が進み、農業離れが進行しているといえる。いずれにしても、農村地域と考えられる福島や山形も、東京と比較すると割合が高いとはいえ、農業従事者はせいぜい1割程度に過ぎず、農業離れが大きく進行していることを示している。自営業について見ると、東京の割合が3割と比較的高くなっている。

3 母親の職業： 母親の職業は、福島では会社員がもっとも多く（26.0%）、農業との兼業（20.6%）、自営業（15.0%）とつづいている。東京では、パートがもっとも多く（34.6%）、専業主婦（23.9%）、会社員（20.4%）の順である。一方、山形では会社員が最も多く（40.

0%), 自営業 (16.5%), 農業との兼業 (10.6%), 専業主婦 (10.0%) と続いている。東京に比べ、山形・福島では会社員・公務員が多い。とりわけ山形では東京の2倍にも達している。専業主婦の割合は東京が最も高く、山形・福島は1割程度に過ぎない。ここで二つの特徴的な点を指摘することができる。一つは、東京に比べ、山形・福島の母親のフルタイムの就業者の比率が高いことである。とくに、山形の会社員の割合の高さが目につく。この結果は、農村地域の収入が必ずしも農業ではなく、会社員・公務員としての給与によっていることを示すものである。もっとも、東京では、パート社員を含めて考えると、会社員・公務員等の給与収入者が半数を越え、他の地域よりも割合が高くなる(55%)。働く形態の違いはあるものの、社会に出て働く女性の多いことがわかる。二つめは、農業との兼業者が父親よりも母親で高くなっている点である。福島・山形ともに、父親(12.2%, 3.3%)よりも母親(20.6%, 10.6%)の比率が大きい。ほぼそと続けられている農業は、母親の労働力に依存していることを示唆するものである。

4 農業をやっている人： 少しでも家で農業をやっている人について整理して見ると、いずれの地域でも全体の半数を大きく下回っている。農業を営む人は、山形・福島の父母・祖父母に限られる。その割合も、山形で3割弱、福島で4割弱であり、過半数の家では農業をやっていないことがわかる。しかも、若者はほとんど従事しておらず、もっぱら高齢者に依存している実態が浮き彫りになっている。農村といえども農家はきわめて少なくなっていることを表す結果である。東京およびその近郊では、農業をやっている人はほとんどいなく、かろうじてごく少数(5%)の祖父母がほぼそとやっているに過ぎない。しかし、農村地帯と思われる山形の低い割合と比べて見ると、東京近郊の割合は以外に高いといえるのかもしれない。

II 地域環境に関する意識

1 今住んでいる町や村をどう思うか： 今住んでいる町や村を「まあ好き」と答える人がもっとも多く、4割前後で各地域ともほぼ同じ割合になっている。ただし、山形の男子では、25.8%と著しく低くなっている。これは、山形の男子の「何とも思わない」の比率が高いために生じた結果である。また、「好き」と答える割合は東京の高校生が最も高く、山形・福島の高校生の2~3倍になっている。また、「嫌い」と答える割合は、福島の高校生と山形の男子で高くなっている。全体的に、東京の高校生の方が山形・福島の高校生よりも、居住する地域を肯定的に受けとめている。

2 高校卒業後働きたいと思う地域： 進路先の全体的傾向を見ると、地域によって大きな違いが認められる。福島・山形では、会社・企業への就職者が過半数を占めている。福島で男女ともほぼ50%、山形では男女ともほぼ60%の生徒が就職すると回答している。これに対して、東京の場合就職者は少なく、男子で17.9%、女子で28.7%である。一方、進学では、逆の傾向が見られる。福島・山形の上級学校への進学率は30~40%であるのに対して、東京では全体でおおよそ7割に達している。興味深い点は、東京の高校生の進学率は、女子(66.9%)よりも男子(77.6%)の方が高いが、福島・山形ではいずれも女子(42.1%, 34.3%)の方が男子(39.6%, 21.5%)よりも高くなっていることである。各地域の就職・進学率の違いは、調査対象として選んだ高校が類似の環境、状況にあるか否かによって大きく異なるため、この結果から進学率の高低を結論づけることはできない。

進学先にはどの地域が選ばれることが多いのだろうか。東京の高校生の場合は、地元が東京で、そこには各種の就職先や進学先が多くそろっていることを考えれば、大半のものが東京およびその周辺の地域を選択していることは当然といえよう。では、福島や山形の生徒はどうだろうか。高校生は男女とも50%前後が東京

などの大都市圏を選択している。地元で教育機関が少ないことを考えれば、当然の結果かもしれない。しかし、女子では38.6%が県内の学校に進学し、さらに東北地方の都市にある学校を選択している人が13.3%いる。これを合計すると、51.9%になる。一般に青年が地元や近辺に留まらないといわれることが多いが、女子の場合には必ずしも当てはまらないことがわかる。また男子でも、地元や東北地方に留まる人を含めて考えると49.2%になり、同様の傾向にあるといえよう。

同じ東北地方にある山形を見てみると、男子では福島の高校生と似た傾向を示している。しかし、女子は、福島の高校生と様相を大きく異にしている。たとえば、進学先に東京を選択する生徒はわずかに18.9%にすぎず、地元(2.8%)・県内(37.8%)、東北地方の都市(37.8%)を選択する割合が78.4%と圧倒的に大きくなっている。福島と山形の女子高生の進学先の違いは、玉川村と高島町の地理的・経済的条件、文化圏の違いを反映しているのかもしれない。つまり、玉川村は比較的東京に近く、首都圏との交流が深く、それに対して高島町は仙台を中心とした文化・経済圏との交流が深いことが考えられる。このように、進学先に関する地域差はかなり大きいものの、地元や県内を選択する生徒が多くいるという事実は注目すべきであろう。

次に就職先について見てみよう。就職先に関しては、上述の傾向はさらに強く、福島・山形ともに、高校生の地元・県内の選択がもっとも高い割合になっている。例えば、福島では、東京などの大都市に就職する生徒の割合は、男女それぞれ25.3%、27.0%とともに3割に満たない。一方、地元、県内、東北地方の都市を選択する割合は、それぞれ男子20.3%、44.3%、3.8%、女子22.0%、46.0%、3.0%で、合計でほぼ7割に達している。山形でもほとんど同じ傾向にあり、高校生の地元・県内志向の強さを示している。こうした地元志向は、玉川村に典型的に見られるように、大規模な工業団地の建設と工業誘致により、地元での雇用機会が拡大

していることによって支えられていると見ることができよう。

3 結婚後も住みたい地域： 福島の高校生では、男女とも地元・県内が多く、合わせると6~7割になる。若者が必ずしも、福島県内への定住を嫌っているわけではないことを示す結果であろう。興味深い点は、地元志向は男子(41.8%)に強く、女子は県内の他市町村を希望するものが多くなっている(49.5%)ことである。また、東京・仙台などの大都市を志向する傾向も、男子(26.8%)より女子に顕著である(38.3%)。山形の高校生も、福島の高校生とほとんど同じ傾向を示している。東京の高校生は、東京近郊を選ぶものが多く、6~7割である。地方の市町村に住むことを希望する生徒は、男女ともに1割程度である。東京の高校生でも、福島・山形の高校生に見られたように、地元志向は男子に強く(41.8%)、女子は都内の他区市町村での居住を好む傾向が見られる(49.5%)。地方の市町村への居住の希望でも、女子の方が(14.6%)男子よりも(11.2%)割合が高くなっている。

4 自分の生活する地域に対する満足・不満(図1)：

① **自然環境：** 福島の高校生では「とても満足」が5割前後であり非常に高くなっている。「やや満足」まで含めると、満足している人の割合は、8割近くなる。山形の高校生もまったく同じ傾向を示している。緑の豊かさや空気・水のきれいな点は高く評価していることがわかる。対照的に、東京の高校生の満足度は非常に低い。「とても満足」と答えた人は、15~16%しかない。「やや満足」を含めても5割に達しない。緑は少なく、水も空気も汚れた東京の現実からすれば当然の結果といえよう。ところで、男子と女子で違いがある。いずれの地域でも女子の方が男子よりも満足度が高い。また、地域差も認められ、福島・山形の高校生の方が東京の高校生よりも満足度が高い。

② **文化面(コンサート・演劇など)：** 文化面(コンサート・演劇など)での福島・山形の両高校生の満足度は、著しく低くなっている。

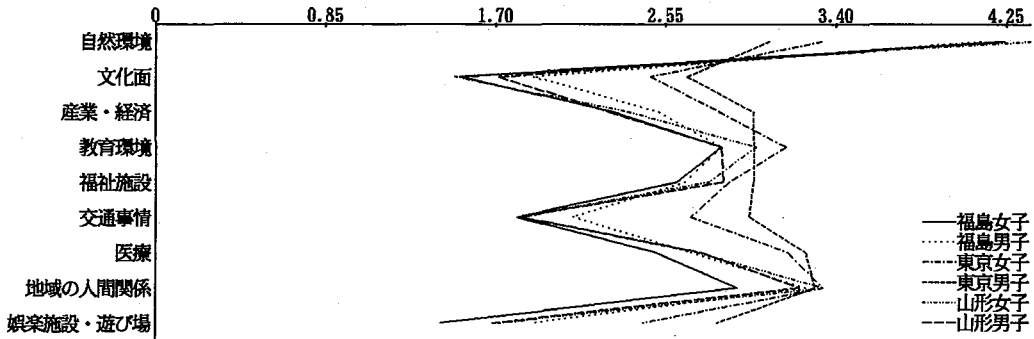


図1 地域別（福島・山形・東京）、性別に見た地域生活に対する満足度

注）横軸は数値が大きいほど満足度が大きいことを表す（1～5点尺度）。

両者の不満の強さは同程度で、男女とも「とても不満」と回答するものだけでも6割になる。「やや不満」のものを合わせると7～8割にも達する。東京の高校生と比較した時この割合には大きな開きがある。東京の高校生の場合は、「どちらともいえない」の回答が4割ちかくあり、もっとも多い。しかし、不満が少ないとはいえ、「とても不満」・「やや不満」を合わせると4割から5割になり、二人に一人が何らかの不満を持っていることになる。さらに、不満は男子に比べて女子の方が大きい。そして、跡取りや農業後継者との結婚に積極的な高校生の方が、自分の住んでいる地域の環境に対する満足度が高くなっている。

③産業・経済面（職種の多さなど）： 福島・山形の高校生の不満は4～5割になり、東京の高校生よりも高くなっている。そして、女子の方が男子よりも不満が強くなっている。これは、女性の職場が一般にかなり限定されていることを反映した結果であろう。東京の高校生では、「とても不満」は男女ともに少なく7～8%にとどまっている。東京では、多様な職種があり、女性の職業選択の幅が大きく広がってきていることを物語る結果であろう。

④教育環境： 福島・山形の高校生の「とても不満」・「やや不満」の割合は男女とも4割弱で、東京の高校生の2割に比べて不満が強い。男女差は認められない。全体的には、「どちら

ともいえない」の回答が5割以上になっており、教育問題に関して、高校生の態度はあまりはっきりしていない。ただ、跡取りや農業後継者との結婚に積極的な生徒は、消極的な生徒に比べ、居住地域の教育環境に満足している傾向が強い。逆に、農家の跡取りになることに否定的な人は、地域の教育環境にも不満を感じているといえる。

⑤福祉施設： 「どちらともいえない」の回答が半数以上になり、福祉に関する高校生の態度があまりはっきりしていないことを示唆している。ほとんどの生徒にとって、福祉の問題はそれほど身近な問題として映っていないのかもしれない。地域による違いだけが認められ、福島の高校生は東京の高校生に比べて、大きな不満を抱いている。山形の高校生の不満は、福島と東京の高校生の間くらいに位置する。

⑥交通事情（通勤電車・バスの便など）： 福島・山形の高校生で不満の割合が高くなっており、「とても不満」だけで5割近くになる。公共交通機関が少ないことと、高校生はまだ車を利用できないことなどを反映していると思われる。東京の高校生は強く満足している。例えば、東京の男子では、「やや満足」・「とても満足」の両回答を合わせると40%になる。東京近郊では、電車・地下鉄・バス・タクシー等引きも切らず運行されている現状を反映している結果であろう。しかし、同時に東京の女子生徒で、

「やや不満」・「とても不満」と回答する割合が5割いる点に注意する必要がある。東京の通勤、通学の限界を越えた混雑ぶりを想像すれば、うなずける結果である。福島・山形に限らず、男子より女子に不満が高くなっているのである。また、福島と東京の、農業後継者や家の跡取りとの結婚に積極的な姿勢を示す生徒は、消極的な生徒よりも地域の交通事情に満足している傾向がある。

⑦医療面： 地域差があり、もっとも不満が強いのは、福島の生徒であり、ついで山形の生徒である。全体的には「どちらともいえない」の回答がもっとも多く、大半の高校生は健康で、医療への関わりが薄いことを反映していると思われる。全般的に、男子よりも女子に不満が強くなっている。

⑧地域の間人間関係・結びつき： 不満を感じる人の割合は、東京に比べ福島・山形の高校生の方が大きく、1～2割程度である。農村部の人間関係のわずらわしき難しさがよく指摘される現実からすると、意外に青年の不満は小さいように思える。むしろ、満足している人の割合の方が大きく、「やや満足」・「とても満足」の回答を合わせると福島・山形ともおよそ3～4割になる。特徴的な点は、山形と東京では、男子と女子の満足度が近いのに対して、福島では女子の不満が男子の不満をしのいでいることである。例えば、「とても満足」している人が、男子では20%近くいるのに対して、女子では3分の1の6.5%しかいない。福島の女子は、地域の間人間関係・結びつきにより強い不満を感じているといえよう。農業後継者や跡取りとの結婚に積極的な生徒は、消極的な生徒よりも地域の間人間関係に満足している傾向が強い。また、結婚に積極的な生徒の間では、男女の意識の違いは小さいが、消極的な生徒の間では、男子より女子の「地域の間人間関係・結びつき」に対する不満が大きくなっている。これらの要因は、女子が農村地域で結婚し、生活することを決意するときの重要な影響源となる可能性があることを示唆している。

⑨娯楽施設・遊び場： とびぬけて不満の大

きいのが、娯楽施設・遊び場に対してである。福島の高校生は「とても不満」と回答する人だけで、女子68.5%、男子53.8%になっている。とくに、女子の不満は強く7割にも達している。「やや不満」という回答を含めると9割になり、ほとんどすべての女子が不満に思っている。男子でも7割以上の生徒が何らかの不満を持っている。同様のことが、山形の高校にもあてはまる。女子では79.8%生徒が、男子では80.9%の生徒が不満を持っている。それに対して、東京の生徒の不満は女子50.5%、男子39.1%で、福島・山形の生徒に比べると割合はかなり小さくなっている。女子に不満が強い傾向がある。ただし、山形では女子と男子の間に不満の大きさに違いは認められない。また、家の跡取りとしての結婚や農業後継者としての結婚に対して積極的な態度を持つ生徒は、消極的な生徒よりも、居住地域の娯楽施設や遊び場に対する不満が小さくなっている。ただし、福島の高校生では、結婚に対する態度の違いによる不満の差はほとんどない。

III 異性・同性の友人との人間関係 一意識面

過半数の人が、勉強や遊び、進路などについて気軽に話せる異性の友達を持っている。異性の友達のいる生徒の割合は、東京で女子66.4%、男子42.7%、山形で女子51.4%、男子41.5%である。山形と東京の男子だけが、4割と半数以下になっている。全体的に女子に異性の友達がいる割合が高く、特に東京の女子にその傾向が強い。福島県では、男女とも異性の友達のいる比率が高い。同性の友達については、どの地域でも9割以上の生徒が気軽に話せる友達がいると回答している。友人関係は、かなり活発なようである。

異性の友達が欲しいと思っている割合は、福島・山形の高校生よりも東京の高校生の方が高くなっている。東京の男子の場合71%が異性の友達を望んでいる。これは、東京の男子に、気軽に話せる異性の友達がいないと回答する割合が高かったことと関係していると思われる。異

性の友達が欲しいと思わない人は少なく、多くの人は気軽に話せる異性との人間関係を求めていることがわかる。また、家の後継ぎとしての結婚や農業後継者との結婚に積極的な人では、男女ともに異性の友達を求める強さは、東京の高校生がもっとも強い。女子高校生の場合、福島と山形間では欲求に大きな差はない。結婚に消極的な女子高校生の場合には、福島の女子に比べ山形の女子の異性との交際欲求の方が強くなっている。一方、結婚に積極的な男子の場合、異性との交際欲求は福島より山形の生徒の方が強い。しかし、結婚に消極的な男子の場合、山形の男子の異性との交際欲求は弱い。

福島・東京とも大きな違いはなく、4～5割の人が緊張せず、気軽に男女間で話せると感じている。山形の高校生は、男女全体で見ると、東京の生徒よりも異性と気軽に話せないと感じている。また、男子と女子では地域によって感じ方に違いが認められる。例えば、女子については、東京の高校生が異性ともっとも気軽に話せると回答しており、福島と山形の高校生間にはそれほど大きな差異は認められない。ところが、男子では、福島の高中生がもっとも異性と気軽に話ができると回答し、次いで東京の高校生、山形の高校生の順になっている。東京の高校生が男子校に所属していることも関係しているかもしれない。さらに、注意しておいたほう

がよいと思われることは、全体的に異性との会話はスムーズに行われているが、全体では女子の32.4%、男子の30.2%の生徒は「あまりあてはまらない」・「まったくあてはまらない」と回答していることである。かつて、男女の交際が自由でなく、容認されにくかった時代の会話のぎこちなさと、異性との交際があたり前に解放されてきている今日の異性とのコミュニケーションのしにくさとは、質的にも意味的にも異なってきたと考えられるからである。

異性と話をするときに、話題に困ったり、何を話してよいのかわからないと感じる高校生は少ない(図2)。興味深いことは、男子の方が女子よりも、異性と話したいと思っても何を話したらよいのかわからないと強く感じていることである。例えば、女子では、何を話したらよいのかわからない」の質問に「まったくそう思わない」・「あまりそう思わない」と否定的に回答する割合は52.7%と過半数になるのに対して、男子では41.6%と半数以下である。また、跡取りとしての結婚や農業後継者との結婚に対する態度との関係を見ると、結婚に積極的な生徒では男女間の意識に大きな違いはないが、結婚に消極的な生徒では、女子は話題に困難を感じる程度が弱く、男子は困難を感じる程度が強くなっている。

さらに、異性とのつき合い方がわからないと

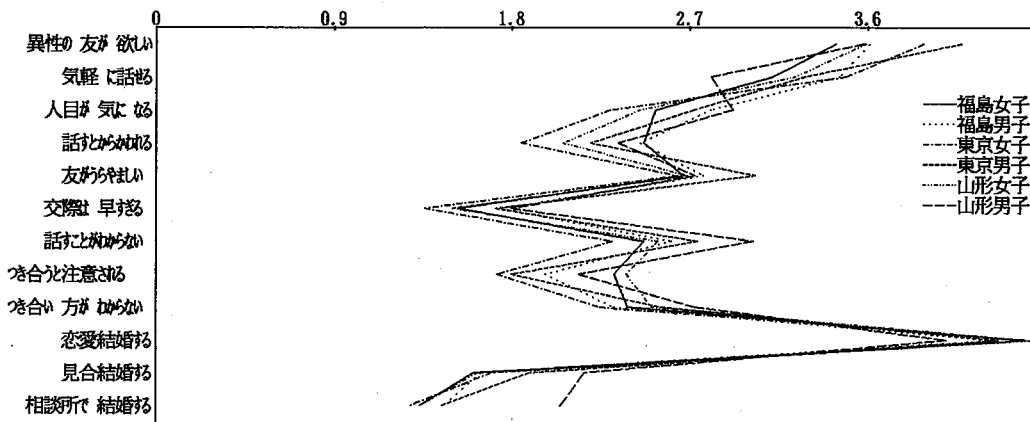


図2 地域別(福島・山形・東京)、性別に見た異性との交際・結婚観

横軸は数値が大きいほど各項目に対する肯定度が大きいことを表す(1～5点尺度)。

思っている人も半数以下になっている。全体では、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を合わせると女子で52.8%、男子で49.4%である。福島の高校生は比較的異性とのつき合いに戸惑いを感じる事が少ないが、山形の高校生は福島の高校生に比べると戸惑いを感じる傾向が若干強い。また、跡取り・農業後継者との結婚に対する態度との関連を見ると、結婚に積極的な高校生では、女子の場合山形の生徒がもっとも異性とのつき合いを感じる戸惑いが弱く、東京の生徒がもっとも強い。それに対して、男子では、東京の生徒の感じる戸惑いがもっとも小さく、福島の生徒の戸惑いがもっとも大きくなる傾向にある。一方、結婚に消極的な生徒では、女子の間に差はないが、男子の間で違いが認められる。山形の男子の戸惑いがもっとも大きく、福島の生徒のそれがもっとも小さくなっている。

今の高校生は、異性と話したり、一緒にいるときに周りの人の目をあまり気にしない。「あまりあてはまらない」・「まったくあてはまらない」と回答する割合は、女子で51.9%、男子で39.9%である。「どちらともいえない」が3割ほどいる。また、人目が気になる人の割合は、1～2割である。男女差が認められ、女子よりも男子の方が、異性と話したり、一緒にいるときに周囲の目を強く気にしていることがわかる。

また、多くの異性と話したり、遊んだりしていかからかわれることも少ないと感じている。「あまりそう思わない」・「まったくそう思わない」を合わせると、女子では63.9%、男子では56.9%になる。からかわれることがあるかもしれないと感じている生徒は1割程度である。そして、ここでも男女の違いが認められる。とくに東京の女子は、異性と交流していても周囲から揶揄されると感じる事が少なくなっている。男子の方が女子よりも、からかわれるのではないかと思う傾向が強くなっている。また地域差も認められ、福島の高校生がもっとも強く、次いで山形、東京の順になっている。全体的に女子の方が男子より男女の関係は自由にとらえており、福島・山形より東京でこの傾向は

強くなっている。男女の交流が、特定の人達だけの間で行われるのではなく、多くの高校生の間で自然に日常的に行われていることを示唆する結果である。周囲の友達も交際する男女を特別視しからかうことも少なく、一般的なこととして受け入れられているのがわかる。

男子の68.8%、女子の57.8%は、自分が特定の異性とつき合っている、まわりの大人から注意されることはないと感じている。注意されるかもしれないと感じる生徒は1割に満たない。現代の高校生は、男女間での交際、あるいは日常の気のおけない人間関係は、ごくあたり前のこととして大人にも一般に受け入れられていると考えていることがわかる。こうした傾向には男女の違いが認められる。女子の方が男子よりも異性とのつき合いに関して、周囲の大人からの干渉が大きいと感じている。また地域差も認められ、東京の高校生は、福島・山形の高校生ほど強く異性とのつき合いに対する周囲の大人の干渉を意識していない。山形と福島の高校生間の意識の違いは認められない。男子よりも女子の感じ方に大きな地域差が認められる。東京の女子は、異性との交際を、周囲の大人に拘束されない自由なものとして強く受けとめている。

高校生が異性と交際することについて、まだ早すぎると考えている人は、ごく少数である。高校生が異性と親しく話したり交際するのは早すぎるという意見に、「だいたいそう思う」・「まったくそう思う」と回答する人は、女子で1.6%、男子で6.0%にすぎない。それに対して、「あまりそう思わない」・「まったくそう思わない」と回答する人は、女子で88.6%、男子で78.5%である。高校生の男女の交際がごく当然のこととして受けとめられていることがわかる。男女間に差が認められる。男女交際を肯定する割合は女子が高くなっている。これらの結果は、自分から異性に対して積極的に話しかけ、働きかけて男女のかかわりを楽しむという感覚が、今の高校生に広く共有されていることを示すものである。特に、男子よりも女子の積極さが目立ち、従来浸透していた「女性は消極的・

受け身的に意識し行動する」といった男女の人間関係に関する通念が、大きく変化している。さらに、この傾向は福島も山形も東京も共通している。

男女交際の積極性は、将来の結婚観にも反映している。結婚相手を親戚や知人から紹介してもらい、見合い結婚すると考える高校生はほとんどいない。結婚相手は自分で見つけ、恋愛結婚すると考える高校生が大半を占める。結婚相手は自分で見つけ、恋愛結婚すると回答する生徒は、女子で82.8%、男子で73.5%である。恋愛結婚しないと予想する生徒は、男女ともわずか3~4%しかいない。そして、恋愛結婚志向は男子よりも女子に強くなっている。また、跡取りとしての結婚や農業後継者との結婚との関係を見ると、結婚に積極的な生徒では男女とも地域による違いはないが、結婚に消極的な生徒では、山形の男子のみが恋愛結婚の可能性をかなり低く見積もっているのが特徴的である。それに対して、親戚や知人から紹介してもらい結婚すると回答する割合は、女子で1.9%、男子で3%たらずである。7~8割の生徒は、見合い結婚の可能性を否定している。性差が認められ、男子の方が見合い結婚する可能性を高く評定している。ここでも女子の方が積極的であり、恋愛結婚に関する男女差を支持する結果である。また、地域差も認められ、山形・東京の高校生は、福島の高中生よりも見合い結婚する可能性が高いと見ている。山形と東京の高校生間には差は認められない。特徴的な点は、福島では男女差はないにもかかわらず、東京と山形では、女子より男子に見合い結婚の予想が高くなっている。とりわけ、山形の男子でこの傾向が強くなっている。都市化され、地域や家族の機能も弱く、恋愛志向が強くなると予想される東京の高校生の方が、福島の高中生よりも見合い結婚志向が強く出ている点は興味深い。

また、結婚相談所などを利用して結婚相手を探すと回答する生徒も1~2%でほとんどいない。まだ、高校生には、結婚が差し迫った現実的な問題となっていないことや、結婚相談所などの内容がわからないことも、この選択肢の回

答率を低くしているのかもしれない。回答には性差が認められ、女子よりも男子の方が将来結婚相談所を利用し、結婚相手を紹介してもらおうと考える傾向が強くなっている。また、地域差も見られ、山形の高校生は、福島・東京の高校生よりも結婚相談所の利用を強く予想している。とりわけ男子にこの傾向が強い。福島と東京の高校生間には差は認められない。そして、大多数の高校生が将来的には結婚したいと回答している。女子で78.9%、男子で79.5%がおおよそ結婚するだろうと予想している。跡取りとの結婚や農業後継者との結婚に対する態度とのかかわりで見ると、結婚に積極的な生徒の方が消極的な生徒よりも、将来結婚したいと思う傾向が強くなっている。

いずれにしても、これらの結果を総合してみると、全般的には旧来の仲人を立てての見合い結婚、他力本願の結婚は、現代の高校生の結婚観の中では影のうすいものになっていることは確かである。恋愛や結婚は自らの活動を通じて獲得するものであるという、個人の自由と積極性、そして当事者の主体性が重要視されていると見ることができよう。こうした傾向が、特に女子に強く認められる点は強調しておく必要がある。あるいは、男子が依然として、従来の男性観・女性観にとどまり、新しい時代の変化に対応していないといった方が適切かもしれない。

IV 異性・同性の友人との人間関係 一 行動面

いかがわしい情報を提供したり、不特定の異性との交際を可能にすることなどで、最近しばしば問題にされてきたダイヤルQ²やパーティーラインの利用はどの程度行われているのだろうか。利用したことのある生徒は少数で、全体では女子2%男子8%弱である。女子に比べ男子の利用率の方が高い。とりわけ、東京の高校生で高く、福島・山形の男子の2倍以上の11.5%となっている。

次に、実際に異性と交際した経験のある生徒がどのくらいいるか見てみると、男女ともほぼ

5割になっている。福島の男子が6割と一番高く、対照的に東京の男子は3割強と比較的少なくなっている。これは、福島の高校が、いずれも男女共学であるのに対して、東京の高校には男子校が含まれていることも影響していると思われる。通学時間、校則の違いも影響しているのかもしれない。全体的には、女子の交際が盛んである。

今までに交際したことのある生徒は、どのような交際経験をしているのであろうか。女子では、福島・山形・東京ともにドライブを経験している人が5割前後と比較的多くなっている。それに対して、男子では、山形の37.5%を最高に、福島・東京は1～2割にとどまっている。地域にかかわらず、女子の車を利用したデートがかなり多いことがわかる。特に女子にその比率が高いことは、高校生同士のつき合いだけではないことや、相手の年齢の高い場合が多いことを示唆しているのであろう。また、この結果は、女子が車によるデートに応じやすいことを示しているのかも知れない。

デートで腕を組んだり、肩を寄せ合ったりしたことのある生徒は、交際経験者のほぼ6割いる。地域の違いは小さく、男女とも近い比率になっている。山形では、男子の経験率が64.5%で女子の56.7%を上回っている。しかし、福島・東京はともに60%を越えており、50%台の男子を1割程度しのみである。一面では、男子よりも女子の方が異性との交際を活発に行っているといえるかもしれない。

またホテルでデートしたことのある生徒も交際経験者の2割ほどいる。山形の女子の比率が31.7%でもっとも高くなっている。男子も山形が25.8%でもっとも高い。さらに、交際の内容、深さでは、6割のものが会って話をする交際をしている。一步進んでキスマで経験するものが2割程度おり、その比率は女子の方が若干高くなっている。また、セックスを経験する生徒も2割前後いる。山形の高校生の経験率が男女とも高く、女子は37.9%で4割に迫る勢いである。男子も31%で、東京の男子の経験率33.3%とほぼ等しい。その他では、福島と東京の差は

それほど大きくない。全体的に女子よりも男子の経験率が高くなっている。また、都市部と農村部の違いも異性との交際についてほとんど差がないといえる。これらの質問はかなりプライバシーに関わるものであり、ありのまま回答しているとは受け取れないかもしれない。誇張して回答する生徒や、逆に抑えた回答をする生徒もいるであろう。しかし、全国調査の結果との類似性や、回答者の誇張と抑制の両方で結果が相殺されることで、大ざっぱに現状を反映していると見ることができるだろう。調査にあたって、一部の高校では、「寝た子を起すな」というところもあった。しかし、高校生の現状はむしろ性に関する適切な情報を教育の一環として、幅広い視点にたって提供していかなければならない段階にきているのではないだろうか。

V 男女の性役割、伝統的価値観の受けとめ方

男子の方が女子よりも、台所仕事や子どもの世話は父親の仕事ではないと考える傾向が強い(図3)。女子では、全体で64.5%がこの考えに否定的な回答をしているのに対して、男子では46.5%と否定派は半数以下である。また、「どちらともいえない」と態度を保留する割合も、女子22.8%に対して男子33.6%と高くなっている。また、地域差も認められ、福島の高校生の伝統的価値観がもっとも強くなっている。跡取りや農業後継者との結婚に積極的な生徒より消極的な生徒の方が、父親の家事・育児に対する男女の意識の開きが大きくなっている。結婚に消極的な生徒の場合、女子は父親の家事・育児の分担を肯定的に受けとめる傾向がより強く、逆に男子は否定に見る傾向がより強くなっている。

ところで、父親の家事・育児観を高校生はどのようにみているのであろうか。父親は、依然として台所仕事や子どもの世話は男のすることではないと強く思っていると推測しているのである(図4)。父親の伝統的な役割を肯定する割合を比較すると、高校生自身では女子12.9%、男子19.8%であり、母親では女子18.0%、

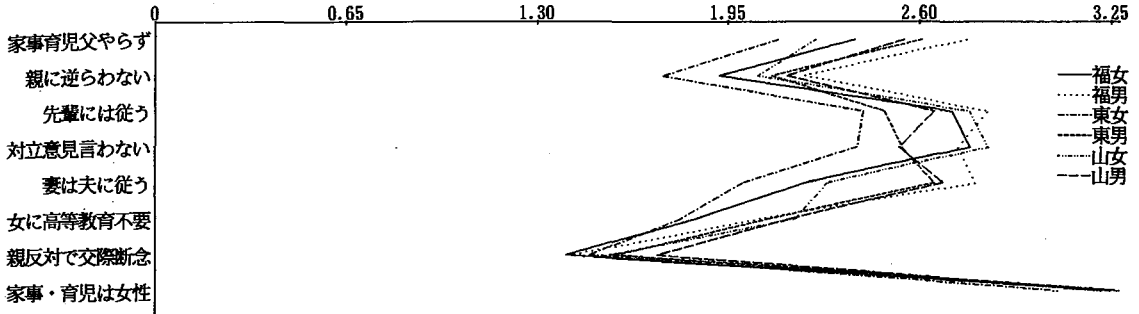


図3 地域別（福島・東京・山形），性別に見た伝統的価値観に対する態度（高校生自身）

注）福女＝福島女子，福男＝福島男子，東女＝東京女子，東男＝東京男子，山女＝山形女子，山男＝山形男子を表す。横軸は数値が大きいくほど各項目に対する肯定度が大きいことを表す（1～5点尺度）。

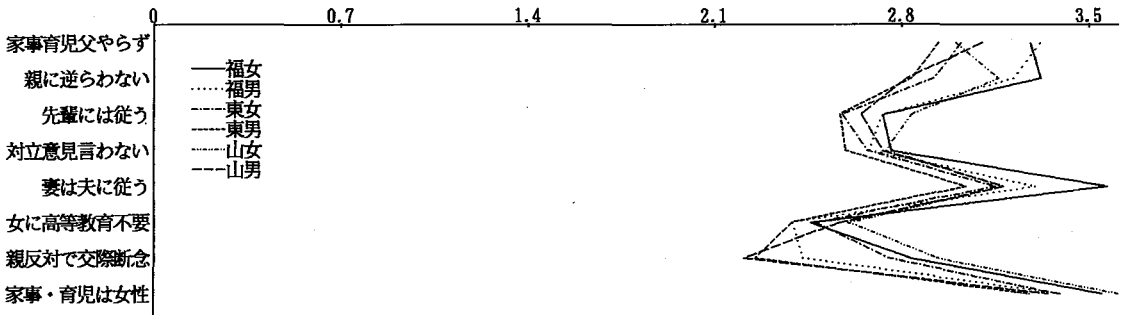


図4 地域別（福島・東京・山形），性別に見た伝統的価値観に対する態度（父親）

注）福女＝福島女子，福男＝福島男子，東女＝東京女子，東男＝東京男子，山女＝山形女子，山男＝山形男子を表す。横軸は数値が大きいくほど各項目に対する肯定度が大きいことを表す（1～5点尺度）。

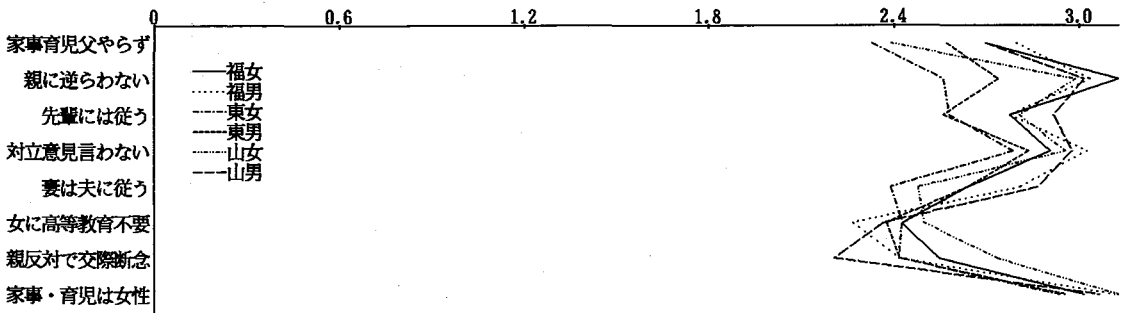


図5 地域別（福島・東京・山形），性別に見た伝統的価値観に対する態度（母親）

注）福女＝福島女子，福男＝福島男子，東女＝東京女子，東男＝東京男子，山女＝山形女子，山男＝山形男子を表す。横軸は数値が大きいくほど各項目に対する肯定度が大きいことを表す（1～5点尺度）。

男子18.8%であり、父親では女子40.3%、男子35.2%である。高校生は、自分と父親との意識の開きは母親とのそれと比べ、かなり大きいと推測していることがわかる。父親の意識の推測については地域差が認められる。福島の高校生は東京の高校生よりも、父親は家事・育児に対して保守的な態度を持っていると考えている。また母親については、男子の方が女子よりも、母親は伝統的な価値観を強く持っていると見ている。地域差は、福島の高校生と山形・東京の高校生との間に認められる。福島の高校生がもっとも強く、母親は伝統的な価値観を持っていると推測している(図5)。

父親や母親は、親の言うことに子どもは従うべきだと考えていると多くの高校生は思っているが、自分では親に逆らってもよいと考える傾向が強くなっている。父親については女子の37.7%、男子の30.2%、母親については女子の28.3%、男子の24.2%が、「親が無理をいっても逆らってはいけない」と考えていると推測している。それに対して、高校生本人では、女子の5.5%、男子の6.6%がこの考えを肯定しているにすぎない。親と子の意識の隔たりはかなり大きくなっていることがわかる。高校生自身の態度には性差が認められ、女子より男子の方が伝統的な価値観を肯定する傾向が強い。父親の態度では、地域差が認められ、福島の父親は山形・東京の父親よりも伝統的な価値観を強く持っていると推測されている。また、母親の態度でも地域差が認められ、福島の母親は伝統的な価値観をもっとも強く持ち、次いで山形の母親が持っていると考えられている。福島・山形間に大きな違いはないが、いずれも東京の高校生の推測との間に大きな違いが認められる。

かなり傾向が弱まるとはいえ、異性とのつき合いにしても同様の傾向が見られる。親は、親の目になわなければ、つき合いをやめた方がよいと考えていると受けとめながらも、多くの高校生は親の反対にあってもつき合いはやめないと考えているのである。例えば、父親については女子の27.6%、男子の11.6%、母親については女子の18.6%、男子の10.3%が、「親の目

になわなければ、つき合いをやめた方がよい」と考えていると推測している。この考えを支持する高校生は、女子1.8%、男子3.3%にすぎない。高校生自身の考え方には地域差が認められ、山形の生徒は福島の生徒に比べ伝統的な価値観が強い。福島と東京、山形と東京間には違いは認められない。父親と母親については、いずれも女子の方が男子よりも、伝統的な価値観を強く持っていると推測している。また、跡取り・農業後継者との結婚に対する態度との関係で見ると、結婚に積極的な生徒の場合、地域間に大きな違いはないが、消極的な生徒の場合、福島と山形の高校生は東京の高校生に比べ、父親は「好きな人ができても、親が反対したらつきあいをあきらめた方がよい」と考えていると見る傾向が強い。

夫婦関係にしても、父親は、結婚したら妻は夫に従うのが当然と考えていると受けとめるのに対して、多くの高校生自身はそうした従属関係を否定している。父親については、女子で46.7%、男子で33.2%、母親については女子で16.5%、男子では16.4%が、「結婚したら妻は夫に従うのが当然だ」と考えていると推測している。それに対して、高校生自身は、女子で11.5%、男子で20.4%が肯定している。全体的に、女子よりも男子は、結婚後の妻の夫への従属関係を肯定する割合が高くなっている。そしてこの傾向は、跡取り・農業後継者との結婚に積極的な生徒の方が消極的な生徒よりも強くなっている。しかも、結婚に消極的な生徒の場合男女差が大きく、女子はむしろ結婚後の夫への妻の従属を否定する傾向が強くなり、積極的な生徒の場合と比較して、男子との考え方の開きが相対的に大きくなっているのである。

次に、男女に対する高等教育の必要性について見てみよう。「女子には男子ほどの高等教育を受けさせる必要はない」という考えは全体的に弱くなってきているようである。しかし、それでも、父親については、女子の21.0%、男子の11.7%、母親については、女子の17.9%、男子の8.6%が、伝統的な価値観を強く持っていると推測している。それに対して、生徒自身は、

女子で7.1%，男子で6.9%が支持している。男女差が認められ、男子生徒にこの考えが強くなっている。また地域差も認められ、山形の高校生は福島の高中生よりも、女子の高等教育は必要ないと考える傾向が強くなっている。

「先輩の言うことは間違っている、一応従っておく」・「会社の中では対立しそうな意見は言わない」などの点では、いずれも肯定は20%前後であり、父親・母親の考えと高校生の考えにはそれほど大きなずれはない。

高校生は、親世代に比べ全般的に伝統的な価値観に対しては否定的であり、特に女子に顕著な傾向である。こうした高校生も家事・育児に関しては他の回答とは異なる傾向を示している点に注意する必要がある。高校生は、家事・育児は、仕事を持っている女性でも、その女性を中心になって行うべきだと考える傾向が強いのである。男女とも共通した傾向である。高校生の家事・育児観は、父親の考え方に近くなっている。例えば、父親については女子で47.5%，男子39.9%，母親については女子で28.6%，男子では26.8%の生徒が仕事を持っている女性であっても、家事・育児を中心的にこなしていくべきだと考えていると推測している。一方、生徒自身は、女子では42.6%，男子で40.0%がこの考えを支持している。特徴的な点は、母親が家事・育児についてもっとも否定的な考えをしていると推測されていることである。おそらく、高校生は、母親が仕事を持ちながら、家事・育児をすることの大変さを体験的に熟知しているからであろう。家事労働、あるいは育児一つとっても大変な労働であることを母親は身をもって示している。そのことが、高校生の母親についての否定的な見方を強くしているのではないと思われる。しかし他方で、高校生の家事・育児観は、伝統的な価値観に近いものになっている。家庭内の仕事、子育ては母親が中心に担うべきであると考えられているのである。この比率は、父親の場合とほぼ同じになっている。「家督継承者³⁾」・農業後継者との結婚に積極的な生徒は、消極的な生徒に比べ、働く女性の家事・育児の負担を強く支持している。この傾向

は、父親と母親の場合でも同様に支持されている。夫婦関係や男女関係については、高校生と父母の価値観が大きく異なっていたにもかかわらず、育児に関しては高校生の考え方はむしろ伝統的価値観に近いものになっている。高校生には、家事・育児と仕事の両立がどの程度大変なことか、実感を持って描きにくいことから、難しい質問かもしれない。しかし、実際に働きながら女性がかつたら家事・育児をこなすことが、女性にとって大きな負担となることに、母親についての回答に表れているように、かなりの高校生は気がついている。しかも、他の伝統的・保守的価値観については、男子高校生や父母に比較して女子高校生は一貫して革新的傾向を示している。これらのことを考慮すると、少なくとも女子高校生は社会的労働も家事労働も育児も母親が一手に背負うというのではなく、むしろ仕事を続けながら家事育児をするだけの仕事上・生活上のゆとりを期待し前提条件にしていると考えた方が、矛盾がないように思える。それに対し、男子については、女子よりも他の諸項目で一貫して伝統的価値志向が強いことを合わせて考えると、「家事・育児は女性がするものだ」という従来の男女の性役割観念から抜け出せないことを示す典型的な資料かもしれない。

VI 父親・母親像

高校生は、自分の父親と母親をどのように見ているのだろうか。異性の親よりも、同性の親を自分の理想像に近づけて見る傾向が強い。例えば、女子では、同性の母のようになりたいと考える割合は25.5%であり、男子では、同性の父のようになりたいとする割合は19.3%になっている。男子が、父親のような人間になりたいと思う割合よりも、女子が母親のような人間になりたいと思う割合の方が高くなっている。とりわけ、東京・山形の女子(31.5%，29.1%)は、母親を魅力的に見ている割合が高い。また、「父母のような人と結婚したいか」という質問に対しては、女子では44.3%が「父親のような

人とは結婚したくない」と敬遠している。それに対して、男子では31.7%が「母親のような人とは結婚したくない」と回答している。「父母のような人と結婚したい」と回答する生徒は男女とも1割である。男女とも父親あるいは母親のような人との結婚を回避する傾向がみられる。否定的な回答がかなり多くなっている点が特徴的である。特に、女子の4割以上が、父親のような人とは結婚したくないと考えている。親を理想像として見る場合と、結婚の対象として見る場合では、評価の観点が異なっているのかもしれない。結婚対象として、近親者を想定することが難しいのであろう。そのため、「どちらともいえない」の回答が多くなったと思われる。

Ⅶ 福島・山形(農村部)に住む人に対するイメージと東京に住む人に対するイメージ

福島・山形あるいは農村の人に対して、地元の高校生も東京の高校生も非常に地味なイメージを抱いている(図6)。イメージの持ち方に地域差が認められる。東京の高校生は、福島の高校生に比べて農村に住む人を地味であるとする傾向が強い。「かなり」あるいは「非常に」

地味であるとする割合は、東京の女子では47.7%、男子では47.8%であるのに対して、福島・山形では男女とも30%台にとどまっている。同様に、東京に居住する人のイメージは、福島の高校生が見る場合と東京の高校生が見る場合とで大きく異なっている(図7)。イメージ内容は、農村部の人に対するものと対照的で、福島の高校生は、東京の人を非常に派手だと見ている。しかし、東京の高校生はそれほど派手だとは感じていない。地域差が認められ、福島と山形の高校生は東京の高校生に比べ、東京に住む人を派手であるとする傾向が強い。福島・山形間には違いは認められない。例えば、福島・山形の高校生の6割前後は、「東京人」を「かなり」あるいは「非常に」派手だと見ている。それに対して東京の高校生の比率は、せいぜい4%にすぎない。大半は、「どちらともいえない」か「どちらかといえば地味」と回答し、その比率は女子78.6%、男子71.2%である。また、農業後継者や家督継承者の結婚に積極的な生徒の方が、消極的な生徒よりも、東京に住む人を派手なイメージでとらえる傾向がある。

東京の高校生の方が福島・山形の高校生よりも、農村部に住む人の義理人情を高く評価して

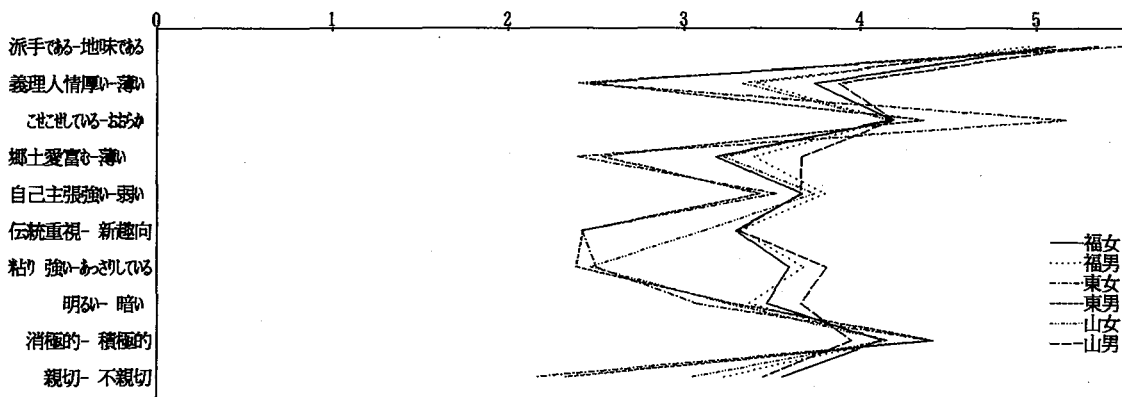


図6 農村に住む人に対するイメージ

注) 福女=福島の女子の地元(農村)の人に対するイメージ、福男=福島の男子の地元(農村)の人に対するイメージ、東女=東京の女子の農村の人に対するイメージ、東男=東京の男子の農村の人に対するイメージ、山女=山形の女子の地元(農村)の人に対するイメージ、山男=山形の男子の地元(農村)の人に対するイメージ、をそれぞれ表す。横軸は数値が大きいほど形容詞対の右の傾向が強く、数値が小さいほど左の傾向が強いことを表す(1~8点尺度)。

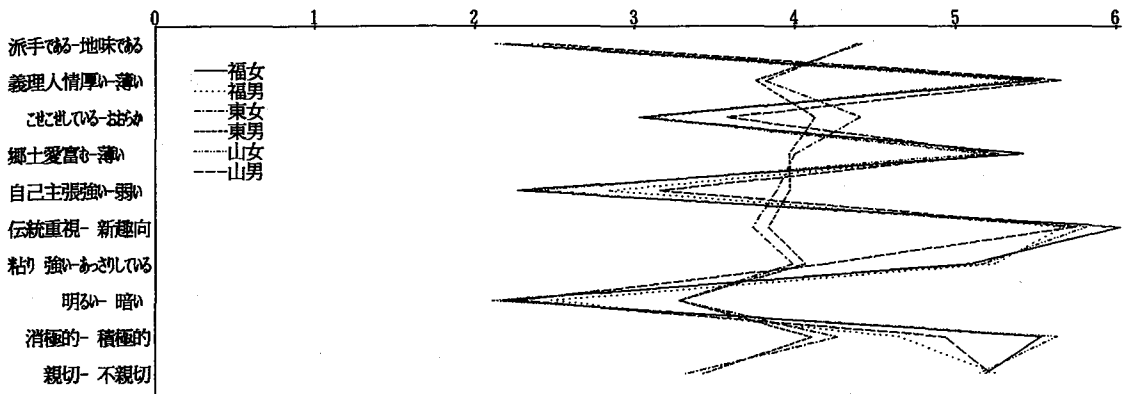


図7 東京に住む人に対するイメージ

注) 福女=福島の子の東京の人に対するイメージ、福男=福島の子の東京の人に対するイメージ
 東女=東京の子の東京の人に対するイメージ、東男=東京の子の東京の人に対するイメージ
 山女=山形の子の東京の人に対するイメージ、山男=山形の子の東京の人に対するイメージ、をそれぞれ表す。
 横軸は数値が大きいほど形容詞対の右の傾向が強くなり、数値が小さいほど左の傾向が強いことを表す(1~8点尺度)。

いる。換言すれば、福島・山形の高校生は、地元の人々の義理人情の厚さを過小に評価しているといえるのかもしれない。例えば、東京では、女子の56%、男子の56.2%が、「かなり」ないしは「非常に」義理人情に厚いと回答している。それに対して、福島・山形で同様の回答をする割合は、20%以下になっている。また、女子では、福島の高校生がもっとも地元の人々の義理人情を低く評価しているが、男子では山形の高校生がもっとも低く評価している。一方、東京に住む人に対するイメージでは、福島・山形の高校生はともに東京の高校生に比べて、義理人情を非常に薄いと評価している。福島・山形の高校生の50%前後が、「かなり」あるいは「非常に」義理人情に薄いと評価しているのに対して、東京の高校生の同様の評価は10%以下である。福島・山形の高校生間には差はない。それぞれの地元の高校生は、実際の人間関係、日常の行動をよく知っているため、地元に対して極端に否定的な反応を示さないものと思われる。

農村部の人は東京の人に対しておおらかなイメージで受けとめられている。特に、東京の高校生は、福島・山形の高校生に比べ、農村部に住む人の「おおらかさ」を高く評価している。

東京では4割の高校生が「かなり」・「非常に」おおらかであると回答しているのに対して、福島・山形の高校生では20%と半分以下になっている。東京の人に対するイメージでは、東京の高校生は、福島の高校生が見るほど東京に住む人はこせこせして見えず、おおらかであると見ている。福島・山形の高校生の4割近くが、「かなり」・「非常に」こせこせしていると回答しているのに対して、東京の高校生で同様の回答をする人は8%以下である。

東京に住む人に比べ農村部に住む人は、郷土愛に富んでいると受けとめられている。例えば、農村の人に対して郷土愛に富むと回答する割合は、「かなり」・「非常に」を含めて3割近くであるが、東京居住者に対しては同様の回答は1割以下になっている。農村の人に対するイメージでは地域差が認められ、福島・山形の高校生に比べて、東京の高校生は、農村部の人の郷土愛を高く評価する傾向がある。東京の高校生の場合、6割以上の生徒が「かなり」・「非常に」郷土愛に富むと回答しているのである。むしろ、農村部に近い福島・山形の高校生の方が、農村部の人の郷土愛を低く評価しているのである。一方、東京に住む人に対するイメージでは、

逆に福島・山形の高校生は東京の高校生に比べ、「東京人」の郷土愛の薄さを強調して受けとめている。福島・山形の5割の高校生が、東京の人は「かなり」・「非常に」郷土愛に薄いと見ているのに対して、東京の高校生の同様の回答はわずかに1割にすぎない。東京の人のもまた、東京の高校生から見ると、福島・山形の高校生が見るほど、郷土愛がうすくはないようである。他の地域の人を判断するとき、判断に有効な情報を十分持ち合わせていないことが多く、ステレオタイプの極端化した回答が多くなるのかもしれない。

東京の高校生は、東京と同じく農村の人は自己主張が強いと感じている。それに対して、福島の高校生は、東京の人の方がはるかに自己主張が強いと見ている。東京の高校生と福島・山形の高校生との間にそれほど大きな差異は見られない。両高校生間に顕著な違いが認められるのは、むしろ東京の人に対するイメージにおいてである。例えば、福島・山形の高校生の5割以上が、東京に住む人は「かなり」あるいは「非常に」自己主張が強いと受けとめている。それに対して、地元東京の高校生で同じ回答をする割合は1割程度である。また、東京の人の自己主張が強いと受けとめる傾向は、男子よりも女子に強い。より詳しく見ると、東京の高校生では男女差は認められないが、福島と山形ではともに女子に強く認められる傾向である。

農村部の人に対するイメージでは地域差が認められ、福島・山形の高校生の方が東京の高校生に比べ、農村に住む人は新しいものをすぐに取り入れると見る傾向が強い。例えば、東京の高校生は6割近くが、農村部の人たちは「かなり」あるいは「非常に」伝統を重んじると回答しているのに対して、福島・山形の高校で同様に思っている割合は2～3割程度である。一方、東京の人に関するイメージでは、地元の東京の高校生で、東京に住む人は新しいものをすぐに取り入れると考える割合はほぼ1割である。それに対して、福島・山形の高校生では6～7割に達している。

全般的に、東京の人と比べ農村部の人にはねば

り強いと見られている。それに対して、東京の人はあっさりしていると受けとめられている。農村部の人に対するイメージでは、地域差が認められる。東京の高校生に比べ、農村部に近い福島・山形の高校生の方が、農村部の人にはあっさりしていると見る傾向が強い。逆に、東京の高校生は農村部の人をねばり強いと見ているのである。東京の高校生の6割近くは、「かなり」あるいは「非常に」粘り強いと思っている。しかし、福島・山形の高校生で、ねばり強いと思っている割合は3割程度である。一方、東京に住む人に対するイメージでも地域差が認められる。福島・山形の高校生(約5割)が、「東京の人」のあっさりした面を強く評価しているのに対して、地元の東京の高校生(約1割)はそれほどあっさりしているとは受けとめていない。

農村に住む人も東京に住む人もそれほど暗いとは受けとめられていない。ただし、東京に住むの方が全般的に明るいとは評価される傾向がある。農村部に住む人に対するイメージでは、男女による違いや地域による違いは認められない。農業後継や「家督継承者」との結婚に積極的か否かの違いによって、農村部の人に対するイメージが異なっている。つまり、結婚に消極的な生徒の方が積極的な生徒よりも、農村部の人たちに対するイメージが暗くなっているのである。また、東京の人に対するイメージでは、福島・山形の高校生の方が地元東京の高校生よりも、東京に住む人をはるかに明るいとは評価する傾向が強い。例えば、福島・山形の高校生では、女子の約65%、男子の約60%が、東京に住む人を「かなり」あるいは「非常に」明るいとは回答している。それに対して、東京の高校生で同様の回答をするのは、女子で22.9%、男子で23.8%だけである。東京に住む人は、外部から実際以上に明るく見られているのかもしれない。東京に住む高校生自体はそれほど明るくないと評価している。

福島・山形の高校生は、東京の人の方が積極的で、農村部の人には消極的と感じる傾向が強い。まず、農村部の人に対するイメージで地域

差が認められる。福島・山形の高校生は東京の高校生よりも、農村部の人は消極的であると見る傾向が強い。福島・山形の高校生で、農村部の人は「かなり」・「非常に」積極的であると回答する割合は、男女とも1割程度であるが、東京の高校生はほぼ2倍の2割が同様の回答をしている。次に東京に住む人に対するイメージを見てみよう。男女差があり、女子の方が男子よりも東京に住む人が積極的であると見ている。また、地域差が認められ、福島・山形の高校生の方が東京の高校生よりも、東京に住む人を積極的だと評価している。とりわけ、福島・山形の女子は男子に比べ、東京の人を積極的なイメージでとらえる傾向が強い。福島・山形の女子の6割が、東京の人は「かなり」あるいは「非常に」積極的であると評定している。同様の回答は、東京の高校生では1割である。おもしろいことに、東京の高校生は、福島の人と東京の人との間にそれほど大きな積極性の違いはないと見ているのである。

東京の高校生は、農村の人をとて親切な人が多いと受けとめている。それに対して、福島の高校生は、東京の人は非常に不親切だと見ている。両者の開きはかなり大きくなっている。農村の人に対するイメージには地域差が認められる。福島・山形の高校生の方が東京の高校生よりも、農村部の人を不親切であると評定する傾向が強い。福島・山形間には違いは認められない。また、「家督継承者」との結婚や農業後継者との結婚に積極的な生徒より、結婚に消極的な生徒の方が、農村の人の不親切さを強く評定する傾向がある。男子では山形と福島の高校生の間に差はないが、女子では福島の高校生の方が農村の人は不親切であると見る傾向が強くなっている。東京の人に関するイメージについては、地域差が認められ、福島・山形の高校生は東京の高校生に比べて、東京在住者は不親切であると見る傾向が強い。福島・山形の高校生は、約4割が東京の人は不親切であると思っているのに対して、地元東京の高校生でそう思う割合は5～6%である。

結果を全体的に見ると、福島・山形の人の方

がのびのびとし、親切で人間味あふれていると受けとめられているが、反面で消極的、伝統を重視する、新しいものをあまりとり入れない、あるいは暗くて自己主張をしないと否定的に見られる傾向が強い。しかし、少し詳しく見ると、次の点は注意しておいた方がよいように思う。それは、福島・山形の高校生は東京の高校生に比べ、農村部、言い換えれば自分たちの住んでいる地域をかなり地味で活力に乏しいと受けとめ、同時にその対局に東京の人を置き、マイナスの面を持つと見ながらも、福島・山形にはない明るく軽快なイメージで受けとめる傾向が強いということである。ところが、東京の高校生は、農村部の人を山形・福島の高校生ほど消極的・否定的に見ていないし、自ら居住する東京の人をもまたそれほど明るく、積極的に見てもいないのである。特にこの傾向は、女子に強いようである。都会の表に現れた華々しさを増幅してとらえる傾向が、福島・山形の高校生にあるのかもしれない。

Ⅷ 農村の結婚難・嫁不足はどうして起こるのか

福島・山形の高校生は半数近くが「嫁不足」問題があると答えている。それに対して、東京の高校生は、問題はないと思っている割合が高く6割を越えている。都市部の高校生は、農村の実情をほとんど知らないことを示唆すると同時に、農業問題等への関心のうすさを示すものであろう。といっても、福島・山形の高校生で「わからない」と回答した割合が3割を越えていることを考えると、農村部の高校生も自分たちの地域で問題として重要視されていることをよく把握していないことを示している。「アジアの花嫁」などさまざまな形で地方の結婚難の問題がマスコミで取り上げられ、自治体もあの手この手の取り組みをしている中で、かなりの割合の生徒がこのような問題への判断を留保している。このことは、結婚難が農村部だけに特有の問題か否かはわきに置くとして、多くの高校生が現実の地域生活から離れ、社会問題からかけ離れた生活を送っていることを物語るもの

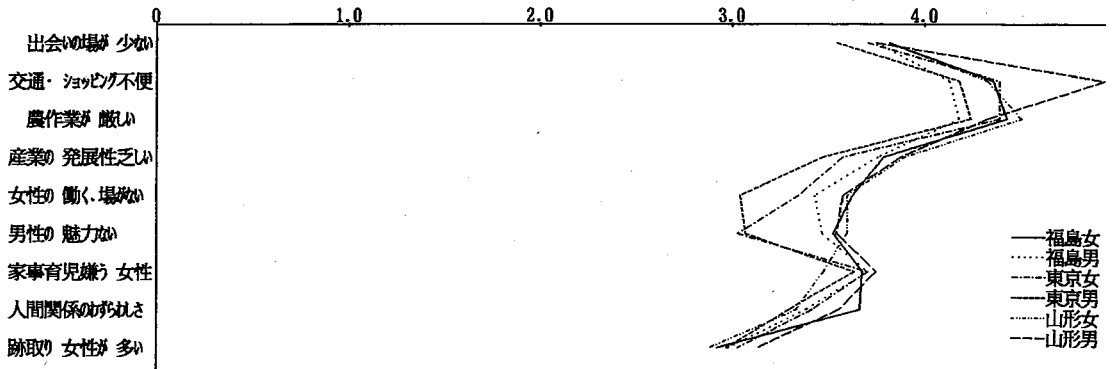


図8 女性が農村に「嫁」に行きたくないと言う理由

注) 横軸は数値が大きいほど各項目の肯定度が大きいことを表す(1~5点尺度)。

かもしれない。

ところで、高校生は「農村の嫁不足」が起こる理由にどのようなことがあると考えているのであろうか(図8)。

①地域の男女の出会いの場、ふれあいのきっかけが少ないから： 地域による意識の違いは認めれず、いずれの地域の高校生も6割以上が「だいたいそう思う」・「まったくそう思う」と肯定的に答えている。かなりの高校生が、結婚難は地域に男女の出会いの場、ふれ合うきっかけが少ないからだと考えている。農業後継者や家督継承者との結婚に積極的な生徒では、福島の高中生がもっとも強く肯定し、東京の高校生との間に開きがある。消極的な生徒の肯定度は積極的な生徒に比べて強く、地域差はない。

②農村・田舎の生活は、交通やショッピングなどが不便だから： この考えを支持する割合はきわめて高く、いずれの地域でも8割以上の高校生が「だいたいそう思う」・「まったくそう思う」と回答している。地域差は認められない。男女差が認められ、特に女子は強く感じている。「まったくそう思う」と強く肯定している生徒の割合は、女子では50.5%で男子の37.5%を大きく上まわっている。「だいたいそう思う」と答える人を含めると9割近くの女子が肯定している。家事の手伝いなどで女子の方がショッピングの機会が多いこと、男子より女子の方が

ショッピングを身近に感じていることを反映しているのかもしれない。また、農業後継者などの結婚に消極的な生徒の方が積極的な生徒よりも、農村・田舎の生活の不便さを強く感じている。

③農作業が厳しく大変だから： 東京の高校生に限らず、福島の高中生自らも農作業の厳しさを重視しており、8割の生徒が肯定している。農作業は過重な労働として高校生に受けとめられている。男女間に意識の違いが認められ、女子の方が男子よりも農作業の厳しさを強く感じている。「だいたいそう思う」と「まったくそう思う」を合わせると、女子の9割が肯定しており、男子の8割を越えている。また、家督継承者や農業後継者との結婚に消極的な生徒の方が積極的な生徒よりも、農作業は厳しく大変だと見ている。

④地域の産業(農業も含む)の発展が望めないから： この考えを支持する高校生は、およそ5~6割である。男女間に大きな意識の違いはない。しかし、地域間に差が認められる。福島の高中生と山形の高中生間に意識の違いはないが、両高校生とも東京の高校生との間には意識上の大きな違いがある。福島・山形の高中生の方が東京の高校生よりも、農業を含めた地域の産業の発展の可能性が望み薄であり、そのことが農村部の結婚難に関係していると見る傾

向が強い。東京の高校生は、農村の実態がよくわからないため、現実感を持って回答することが難しいのかもしれない。

⑤地域に産業が少なく、女性の働く場がないから： 地域の産業の発展性に関する項と同様に約5割の生徒が肯定している。性差が認められ、男子よりも女子の方が強く肯定している。男子に広く女子に狭い現実の就職状況を反映している回答であろう。また、農業後継者などとの結婚に積極的な生徒では消極的な生徒に比べて、東京の生徒と福島・山形の生徒との意識の開きが大きくなっている。つまり、結婚に積極的な東京の高校生は、農村部の結婚難を産業が原因になっているとはそれほど強く考えていない。

⑥地域の男性に積極性や魅力がかかるから：

この理由を肯定する人は3～4割である。興味深い点は、意識に地域差があり、東京の高校生の方が福島・山形の高校生に比べ、地域の青年自身の魅力や積極性のせいで結婚難になっているのではないと見る傾向が強いことである。東京の高校生が、農村地域を知らないということも、こうした結果を生む一因になっているのかもしれない。しかし、地域に対するイメージの結果などを合わせて考えると、福島の高校生が必要以上に地元を否定的にとらえている可能性もある。また、「家督継承者」や農業後継者との結婚に消極的な生徒ほど、農村部の結婚難は、地域の男性の積極性や魅力のなさによっていると見る傾向が強くなっている。結婚に積極的な生徒では、性差は大きくないが、結婚に消極的な生徒では男子より女子にこの傾向が強くなっている。さらに、積極的な生徒では、東京の高校生の肯定度は弱く、福島・山形の高校生の肯定度ははるかに強くなっている。結婚に消極的な生徒間には差は認められない。地元の高校生自身が、自らの地域の男性の魅力や積極性をかなり低く評価していることがわかる。この背景には、福島・山形の高校生には、地味な農村青年に比べて、一見華やかでかろやかに見える都市部の青年に対するコンプレックスがあるのかもしれない。

⑦家事や育児を女性だけが負担することを嫌う女の人が増えたから： この理由を肯定する高校生は5割を越える。また、農業後継者などとの結婚に積極的な生徒の間では、地域間の意識の差はないが、結婚に消極的な生徒では、東京の高校生は他の地域の高校生よりも肯定する傾向が強くなっている。

⑧地域のしきたり、家や近所の人とのつきあい・人間関係がわずらわしいから： 地域による違いは認められず、農村の人間関係はわずらわしいと認めている人は、福島・山形・東京の高校生ともに半数以下になっている。若干女子の方が男子より人間関係のわずらわしさを強く意識している。女子では福島の高校生が一番わずらわしさを高く評定し、男子では山形の高校生が高く評定する傾向がある。また、農業後継者などとの結婚に消極的な生徒の方が、積極的な生徒よりも農村部の人間関係をわずらわしいと受けとめる傾向が強くなっている。特に、結婚に消極的な女子で、この傾向が強くなっている。

⑨地域には、家を継がなければならない女性が多く、結婚しにくいから： この考えはあまり強く支持されていない。肯定的に回答する生徒の割合は1割程度に過ぎない。男女差も地域差も認められない。ただひとつ、「家督継承者」や農業後継者との結婚に積極的な生徒よりも消極的な生徒の方が、農村部の結婚難は家を継承する女性が地域に多く、そのことが原因になっていると考える傾向が強い。

IX 高校生が描く将来の職業・結婚

10年後に就いている可能性の高い職業を見ると、男性は会社員、専門的・技術職員が多い。一方、女性を見ると、専業主婦が20～30%になっている。女性の会社員志向は、山形の女子がもっとも高く4割で、福島・山形の高校生を1割強上回っている。母親のフルタイムの会社勤務率が山形でもっとも高かったことと対応する結果といえよう。また、女子の専門的・技術職員への就業の割合が男性と同様に高くなってい

る点は、注目に値しよう。特に、東京の女子は、福島・山形の高校生を1割程度上回り、35%に達している。むしろ男性より高い値になっている。職業を通じて自己のもてる力を発揮したいと思う女性が多いことを示す結果である。さらに、7～8割の女性が10年後には結婚していると予想しているにもかかわらず、専業主婦になると答える割合が3割弱であることを合わせて考えると、過半数の女性が結婚後も家事・育児の専業になるのではなく、男性同様に社会で働き続けることを希望していることになる。ここには、男は仕事、女は家事という伝統的な性役割観に縛られない女子高校生の姿が現れている。

ところで、10年後の既婚・未婚の予想では、おおかたの女子は結婚していると予想しているが、2割の生徒は結婚していないと予想している。男子の未婚予想はさらに高く4割近くになる。単なる予想であり、現実性は小さいが、必ずしも早期の結婚を前提にしていない生徒が少なからずいることを示すものであろう。

X 跡取り、農業後継者との結婚に対する態度

就業先に農業をあげる高校生は皆無に等しい。結婚や農業を現実的に考えるには、高校生には距離がありすぎる。しかし、想像段階で、彼らが農業や跡取りといった問題をどのようにとらえているか見ることも意味があると考ええる。もっとも多い回答は、「結婚して跡取りになり、農業を一緒にやる」である。特に、東京の女子では45.8%が「結婚して、跡取りになり農業をやる」と回答している。福島・山形の女子が30%弱であるのに比べて高い割合になっている。一方、男子では、福島の高校生の割合が37.3%と、東京・山形の高校生に比べ高い割合になっている。跡取りになる条件、農業をやる条件のいずれかを無視するならば、5～6割の男女が結婚すると回答している。その反面、結婚そのものを考え直したり、否定的な反応を示す人も3～4割いる。

XI 全体的討論

山形、福島、東京の高校生の意識と行動をさまざまな面から比較し、整理してきた。ここでは、まず結果全体から読み取れる事がらを検討し、その後で、地域によって認められる高校生の意識・行動上の特徴的な違いについて考察することにする。

農村部の住民の農業離れ、サラリーマン化の進行が激しい。同じ農業地帯の山形と福島の比較では、山形の農業離れが進行しているようである。このことは、山形の女性の会社員の比率が40%と三地域で最も高くなっていることにも反映している。このように、農村部といえども経済的に、農業外収入、特に給与収入に依存する割合が高いことがわかる。就業形態としては、農村部と都市部の差は小さくなっている。しかし、生活全体を見ると、農村部の祖父母との同居比率はきわめて高く、山形・福島と東京の間には大きな違いがある。農村部が急速に工業化する中であって、家族の形態は依然として農業隆盛時の二世帯、三世帯家族の人間関係が維持されている。とりわけこの傾向は、山形で顕著である。農業を行っている場合でも、主に給与収入に依存し、自家の食料としての米穀・野菜類を作付けする程度の農家が大半を占めているのであろう。しかしその、担い手は若者ではなく、父母または祖父母といった高齢者に専ら依存しているのが現実である。農業につく高校生が皆無に等しいことを見ると、農業後継者は、農村から輩出するという従来の発想はすでに成り立たないことがわかる。事実、彼/彼女は、例外なく会社・企業へと就職していくのである。

工場の農村地域への進出・誘致によって雇用機会の拡大が図られ、若者の農業以外での地元への就職・定着が可能になっていることが、この背景にある。実際過半数の高校生は、地元・県内の企業に就職することによっても裏づけられる。全体的に、福島の高校生は東京志向が強く、山形の高校生は東北の都市への志向が強く

なっている点が特徴である。経済圏・文化圏の違いが関係しているのであろう。いずれにしても、生計の維持が可能ならば、かなり多くの高校生が地元近在に留まりたいと考えていると解釈できる。同時に東京の高校生も、地元東京を定住地として好むことから、「住めば都」になるのであろう。ただ、興味深い点は、全般的に女子は、地元ではなく県内の他市町村への居住を好む傾向が強いことである。「女三界に家なし」といわれ、家を出て嫁ぐことを前提とした日本文化、伝統が今でも女性の意識に大きな影響を及ぼしているのかもしれない。家制度、土地の代々の継承等がさまざまな矛盾をきたし、「家を相続する」青年の結婚問題をさらに難解にしている。さまざまな権利を剥奪されてきた女性は、今や旧習やしがらみから解放されることによって家制度を背負いつづける男性よりも自由な結婚を選択できる立場に立っているのかもしれない。この調査結果全体を見渡しても、女子の方が男子よりも自由で、解放的な考えを持ち、行動している傾向が強い。

二点目は、現在高校生の生活が自らの地域に根ざしていないことの問題である。結婚難の問題が、農村の特有のことか否かは脇に置くとして、各地で結婚対策事業やフィリピン、韓国、中国などのアジア諸国から花嫁を迎える後継者対策など必至の取り組みが展開されている。それにもかかわらず、地元でも問題の存在を知らない生徒がかなりの割合でいる。高校生の関心は、地域の深刻な問題に向けられていないのである。彼／彼女の第一の関心は、娯楽施設、遊び場に対するものである。そして、文化面に關するものへと続いている。文化面に関しても、優れた芸術・芸能や地域の伝統文化など腰の座ったものというより、コンサートや公演など若者向けの大衆芸能に関するものが中心になっているようである。本調査が高校3年生を対象としていることを考えると、職業選択に深く関わる地域の産業・経済に対する不満がもっと強くでるのが予想できる。なぜなら、地方青年を対象とした調査では、一般的に賃金や労働条件はそれほどよくない場合が多いからである（日本

青年団協議会、1990、1991）。つまり、自分に合った職業の選択が容易でない現状からすると、地域の産業・経済に対する不満は、東京の高校生に比べ、福島・山形の高校生で高くなると考えられるのである。また、教育や福祉・医療に関しても、都市部に比べ農村部の方が選択の幅が狭いと考えられ、同様の地域差が予想される。結果を見ると、産業・教育・福祉・医療いずれの場合も山形・福島の高校生の不満が東京の高校生のそれを上回り、予想を支持している。しかし、こまかく検討してみると、これらの項目の回答では、どの地域の高校生でも遊び・娯楽、文化、交通の項目の回答に比べ「どちらとも言えない」の比率がかなり高くなっているのである。いずれもほぼ5割前後が判断を保留しているのである。つまり、山形・福島と東京では大きな地域差があると考えられる社会的な問題に関して、高校生の意識にはそれほど大きな違いが認められないのである。このことは、地域の違いにもかかわらず、高校生の関心は、娯楽や大衆文化にもっとも強く向けられており、生活の基盤となる産業・経済、教育、福祉、医療などの身近な社会的あるいは地域的な問題にはあまり向けられていないことを示すものであろう。

三点目は、伝統的価値観や人間関係の変化に関するものである。地域の違いにかかわらず、家父長制的な価値観は弱くなっている。高校生が親の權威を絶対視することはほとんどない。とくに、高校生は、親と対立する場合には自分の選択を優先させる割合が高い。彼らは、父親がもっとも保守的な考えをしていると推測し、両者の意識の開きはかなり大きい。しかし、親自身も子どもを思いどおりにはできないと考えていると推定している。また、多くの高校生は、異性との交際・人間関係を解放的に結んでいる。男尊女卑の考え方は、しだいに姿を消してきつつある。男性に従属する女性としてではなく、両者が社会的・経済的に自立し、対等な関係を結ぶ社会を高校生とくに女子高校生は強く望んでいる。これらのことは、結婚後も仕事を続ける女性、専門職を希望する女性の多さに

も現れている。そして同時に、女性は自ら納得しなければ結婚を選択しない時代にあることを示している。今後人間関係を単なる放らつな解放に向かわせるのではなく、老若男女にかかわらず相互の人格を尊重する人間関係に発展させることが課題であろう。

最後に、地域差についてみると、大まかに次の傾向が認められた。①地域生活に関する満足度では、東京の高校生の満足度が高くなっている。山形・福島の高校生は似たパターンを示すが、福島の子の不満がもっとも強い。特に、文化面、遊び場に関してこの傾向が強い。②異性との交際・結婚観では、東京の女子が一貫して異性との交際を自由に気楽に行っている。山形の男子につき合い方や何を話してよいのかわからないと回答する割合が高い。呼応して、将来結婚相談所を利用して結婚すると回答する割合も山形の男子で高くなっている。また、つき合うとまわりの大人から注意されると回答する

割合は、福島の子と山形の男女で高くなっている。③伝統的価値観では、福島の男子が一貫してもっとも強い。一貫して低いのは東京の女子である。④農村に対するイメージでは、東京の高校生は一貫してもっとも肯定的に受けとめている。それに対して、山形の男子は一貫してもっとも否定的なイメージを抱いている。逆に、東京に対するイメージでは、山形・福島の高校生は一貫してもっとも肯定的に受けとめており、かなり極端化している。⑤女性が農村に「嫁」に行きたくないという理由では、東京の男子の肯定的に見る傾向がもっとも強い。山形の男子はもっとも弱い。

このように、全体的に、東京の高校生は解放的な人間関係を結んでおり、地域の受けとめ方も肯定的である。対照的に、山形の男子に消極的な傾向が見られる。

[引用文献]

日本青年団協議会 1990 第35年全国青年問題研究集会報告書 日本青年館

日本青年団協議会 1991 レディース フォーラム'91 報告書 日本青年館

[注]

- 1) 埼玉大学教育学部教育心理学講座
- 2) 日本青年館結婚相談所
- 3) 「家督継承」あるいは相続は、旧民法で戸主が死亡したりして戸主権を失ったとき、相続人が戸主としての地位とそれに伴う権利・義

務を受け継ぐ制度である。法律上の規定がなくなった現在でも、戸籍筆頭人は旧民法上の戸主と同様の役割・義務を負っているという観念・慣行が強く残っている。ここではこうした観念や慣行を強く意識して行動する個人を表すために「家督継承者」ということばを象徴的に用いた。「家の跡取り」と同義に用いている。

(1992年10月16日提出)

(1992年10月16日受理)

Research on the Attitude of the High School Students toward Their Everyday Life.

Tomohide BANZAI and Youko ITAMOTO

For the purpose of investigating the attitude of the high school students in rural districts toward their life, some questionnaires were administered to three groups of the students. The first group are the students of the school located in Yamagawa (Takahata town), the second in Fukushima (Tamagata village), and the last in Tokyo. The former two schools are in rural areas of the northern part of Japan. Tokyo is the most urbanized city and the metropolitan of Japan. To clarify the characteristics of the student's attitude in terms of conventional or traditional thought and so on, we compared their attitudes with one another among the three areas, Yamagata, Fukushima and Tokyo. The major findings are as follows.

1. Today, in rural districts, few people are engaged in agriculture and most people work in various companies as well as in Tokyo. In particular, this is the case with young people.

2. Both in Yamagata and Fukushima, the ratio of the extended family of grandparents, parents and their children living together in the same house is much higher than in Tokyo. In contrast, the most typical type of the family in Tokyo is the one called "nuclear" family, which doesn't include any grandparents.

3. In general, high school students aren't interested in the social issues, for example medical, political, or social welfare problems. They concentrate their attention on amusements.

4. Students are not as conventional, traditional or authoritative in their thinking as their parents. Many of the students give priority to their own preferences over their parents views.

5. A good many students make male and female friends with ease. However, it seems that female students are more active in making dates.

key words : rural district, attitude, Fukushima, Yamagata, Tokyo